

授業改善プロジェクト（報告）

— より良い授業づくりを目指す取組み —

総合教育センター授業改善プロジェクトチーム

学習指導要領の改訂に伴い、「思考力・判断力・表現力等の育成」が求められ、そのための授業改善が喫緊の課題となった。総合教育センターでは、平成23年度に授業改善プロジェクトを立ち上げ、総合教育センターとしての授業改善の支援について検討した。平成24年度は、平成23年度に作成した資料を研修や研究において活用し改善を図るとともに、新たに組織的な授業改善につながる資料の作成にも取り組んだ。

はじめに

平成20年に小・中学校、平成21年に高等学校の学習指導要領が告示されたが、そのポイントとして示されている、いわゆる学力の3要素の中に「思考力・判断力・表現力等」がある。これらを育成するためには、これまでの授業を見直す必要がある。中央教育審議会はその答申の中で（平成20年1月）、これに関連して、校種や教科を問わず「言語活動の充実」を教育内容に関する主な改善事項の一つに挙げ、言語活動を各教科の指導計画に位置付けて授業の構成や進め方を改善する必要があることを指摘した。

総合教育センターでは、研修講座等における授業改善に対する取組みをこれまで以上に充実したものとするため、平成23年4月に2年間の授業改善プロジェクトチームを立ち上げた。その中で、「授業づくり」、「授業観察」の二方面から研究・検討を行い、各学校における授業改善を支援するための資料を作成した。

具体的には、「授業づくり」への支援資料として「高等学校初任者のための『授業づくりガイド』」、「単元構想シート」、「授業観察」を行う際に活用する資料としての「授業レリーフシート」の3点である。

さらに平成24年度は、教育局高校教育指導課が中心となって作成した「組織的な授業改善に向けて～高等学校における授業研究の取組～」を受けて具体を示す取組みとして、先進的な取組みを行っている学校の事例を集約して冊子を作成した。

ここでは、2年間にわたってプロジェクトチームで進めた、授業改善に向けた総合教育センターとしての支援についてまとめる。

プロジェクトの取組みの経過

平成23年度から2年間にわたり授業改善に関する取組みを企画・立案・推進するためのプロジェクトとして「授業改善プロジェクト」が発足した。

プロジェクトの目的は、総合教育センターとして、より良い授業の在り方について研究を深め、周知して

いくことである。そこで平成23年度は、「授業をつくる」「授業を観る」「授業を伝える」の三つの視点に基づいて検討を進めることとした。

「授業をつくる」視点とは、新しい学習指導要領が示す授業の在り方をまとめ、授業改善につながる方策を追究するものである。そこで、授業づくりの一つの考え方として「単元（題材）による授業構想」の考え方を整理し、「単元構想シート」を作成した。また、増大する若手教員の育成も急務であることから、授業づくりについて若手教員に理解を促す資料として、授業づくりの基本について解説した「授業づくりガイド」を作成した。

「授業を観る」視点とは、授業の相互観察や研究協議など、教員全体で取り組む、すなわち組織で授業改善に取り組むための方策を追究していくものである。そこで、授業観察の際の視点を明らかにし、授業者と共通の視点をもって授業を観察するための「授業レリーフシート」を作成した。

「授業を伝える」視点とは、これらの成果を総合教育センターとして、個々の教員あるいは学校に、発信・還元する方策を追究するものである。そこで、平成24年度の研修講座や各課事業において、平成23年度に作成した授業改善につながる資料の活用を進め、改善に向けて作業を進めた。

24年度の取組み

1 「授業づくりガイド」の活用と改訂版の作成

平成23年度授業改善プロジェクトにおいて、初任者に授業づくりの基本について説明する資料として「高等学校初任者のための『授業づくりガイド』」を作成した。全体を「授業づくりの前に」、「授業の計画にあたって」、「授業の実践にあたって」、「授業の振り返り」の4章に分け、各章で10項目を立項した。この章立ては授業づくりの道すじになっており、初任者が必要に応じて気軽に活用でき、実効ある冊子になることを目指し構成を工夫している。

平成24年度は、研修講座や各課事業において積極的

に活用しつつ、内容を検証し、改訂版の作成を行うこととした。

(1) 所内での活用の推進

活用場面として想定したのは、基本研修講座授業力向上区分（主として初任者研修講座高等学校）、カリキュラム・コンサルタント事業¹、2年目教員を対象とした学校訪問支援などである。年度当初には、所員研修会を開催し、活用に応じたアイデアを出し合ったり、基本研修での活用に向けて、シラバスに基づく研修内容を検討したりと、担当指導主事間で活用する箇所を共有した。

(2) 検証

「高等学校初任者のための『授業づくりガイド』」活用状況の検証として、指導主事としての活用と、受講者としての活用の二つの観点から振り返りを行うこととした。

基本研修講座授業力向上区分担当の指導主事が作成した活用状況に関する記録から、課題として感じたことや改善点についての意見を集約した。受講者には講座の最終日にアンケートを実施した。

指導主事からは、初任者研修講座での活用ということもあり、今求められている授業の解説や、評価規準の考え方や単元による授業構想など、授業の準備についてまとめた2章の活用が多く、内容についても有効であるとの回答が多い。研修講座で扱った内容を、授業づくりガイドを開いて確認する、研修のスライドに授業づくりガイドの掲載ページを入れて講義するなど、指導主事が工夫して活用した様子が見られた。

また、受講者のアンケートにおいても同様に、単元による授業構想や生徒に身に付けさせたい力の解説部分が役立つという回答が多かった。一方で、研修では扱うことが少なかった、黒板の使い方やICTの活用、

第1表 指導主事が講座で活用したページと受講者が役に立ったと感じたページ

講座での活用状況		受講者の活用状況		
順位	章	タイトル	章	タイトル
1	2	単元全体を見通して構想を練る	1	生徒が主体の授業
2	2	評価規準をはじめに押さえよう	2	「生徒に身に付けさせたい力」は何だろう
3	2	単元目標の考え方	2	単元全体を見通して構想を練る
4	2	いつ、どこで、評価するのか	3	黒板の使い方
5	序	いま求められている授業について	2	単元目標の考え方
6	1	生徒が主体の授業	4	関心・意欲・態度はこれを見る
7	2	「生徒に身に付けさせたい力」は何だろう	2	評価規準をはじめに押さえよう
8	4	関心・意欲・態度はこれを見る	2	ICTを活用しよう
9	2	学習活動を組み立てる	2	いつ、どこで、評価するのか
10	3	学習活動にはふさわしい学習形態がある	2	ワークシートの活用の仕方

1 学校及び教職員、学校関係諸機関等からのカリキュラムに関する相談や問い合わせに対し、所員の派遣や資料提供などの支援を行う事業。

ワークシートの活用など、具体的な事例を提示した箇所の活用が多く、役に立ったという回答が多くなっている。（第1表）

受講者アンケートの自由記述にも、「チェックシートがありがたかった。実際にやってみて気付くことがあった」、「具体例がもっとあるとよい」などの感想が多く寄せられており、具体策を提示したものへのニーズが高いことが分かる。

(3) 改訂に向けて

検証結果を踏まえて、平成25年度版「授業づくりガイド」を作成することとし、編集会議を行い、作業工程を決めた。具体的には、内容が重複しないように再構成すること、具体的な事例を増やしより分かりやすい内容を構築すること、さらに、教科に特化したページを新設することとし、初任者研修講座授業力向上区分担当の指導主事を中心に原稿を作成した。

第5章として新設した「各教科の授業」では、教科の特性を「ここがポイント」に示し、それを踏まえた授業づくりができるように内容を検討した。いわば、各教科の授業づくりの具体が集約されたページである。

また、第5章は、他教科を担当する教員にとっても、参考となる部分があると考えられる。自身の教科だけ学ぶのではなく、視野を広くもち、他教科からも学ぶ姿勢につながることを期待して作成した。

(4) 「授業づくりガイド」の成果と課題

これまで、高等学校教員を対象とした授業づくりの基本を解説した資料は少なく、初任者が手元において活用できるものとなったことは大きな成果である。

また、ホームページでの公開により、県内の中学校から、「内容がとても分かりやすく、中学校でも共通する部分があるので、『授業づくりガイド』について校内研修をしたい」といったカリキュラム・コンサルタント事業への依頼もあり、授業づくりについて広く発信できたことを実感している。

今後も活用方法を工夫し、活用場面を広げるとともに、総合教育センターとして年度ごとの見直しと改訂を行い、充実を図っていく必要がある。また、受講者への追跡調査をするなど、活用状況の把握に努め、更なる改善へとつなげていきたい。

2 「単元構想シート」の活用

単元（題材）を通して授業の構想を練ること、評価を踏まえた授業づくりをすることが、今求められている。

そこで、単元による授業構想を進める際に有効活用できる資料として、「単元構想シート」を作成した。

(第1図)

(1) 研修講座での活用

基本研修講座の中で、単元による授業構想の基本的な考え方や評価規準の適切な配分の在り方について伝

える手立てとして、記入例を提示して解説した。

例えば、基本研修講座の小学校授業力向上区分において、授業づくりの道すじについて概略を解説したり、評価規準に焦点を絞って解説したりと、受講者に合わせた活用方法の工夫をした。

初任者研修講座で、授業づくりの基本として、単元目標の設定から学習活動の計画まで、まず、一連の流れを解説し、単元を通した授業構想の重要性とポイントについて扱った。

「単元構想シート」を活用し具体的な評価規準をバランスよく配置する作業を行い、評価するプロセスを検討するといった演習では、「単元（題材）で構想することができ授業構想の仕方が分かった」との受講者の声も聞かれた。

2年経験者研修では、評価に焦点を当て、評価規準の設定と評価方法の決定など、「単元構想シート」を資料として、目標が実現した姿を想定した具体的な評価規準から評価方法や学習活動を考える演習を行った。「評価をどのようにしたらよいか分からない」と言った受講者も、演習の中で具体的な作業をしたことで、評価について考えることができるようになったと、「単元構想シート」の効果を実感していた。

(2) カリキュラム・コンサルタント事業での活用

各学校、教育委員会等から、学習評価について研修したいという、カリキュラム・コンサルタント事業への依頼が増えており、その際の説明資料として、「単元構想シート」を活用した。

例えば、A町の小学校で実施した校内研修を実施する際の学校からの要望は、「観点による評価について知りたい、評価を踏まえた授業づくりについて解説してほしい」であった。これまで授業づくりというと、まず、学習活動を決めて授業を実践し、実際に評価規準を確認するのは授業後であり、評価から授業を構想することに違和感があるとの声も聞かれた。

こうした要望に応える資料として、「単元構想シート」は大変有効であるといえる。

その理由として、シートの上段に単元目標と評価規準を明記するように構成していること、単位時間ごとの具体的な評価規準を、表の左側に配置できるようになっていること、評価規準、評価の方法、主たる学習活動、指導上の留意点という授業づくりの道すじによって表が構成されていることなどが挙げられる。

研修後には、「観点別評価の必要性を再認識した」、「観点別評価について再度学び、指導に生かす必要性を感じた」といった感想が聞かれた。一方で、「具体

単元構想シート		教科（ 中学校1年 数学 ）		単元名（ 資料の整理と活用 ）			
単元（題材）の 評価規準	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解	単元（題材）目標		
	様々な事象についての資料を収集して整理したり、ヒストグラムや代表値などを用いてその傾向を読み取ったりするなど、数学的に考え表現することに興味をもち、意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。	ヒストグラムや代表値などについての基礎的・基本的な知識及び技能を活用しながら、事象を見通しをもって論理的に考察し表現したり、その課程を振り返って考えを深めたりするなど、数学的な見方や考え方を身に付けている。	資料を表やグラフに整理したり、代表値を求めたりするなど、技能を身に付けている。	ヒストグラムや代表値の必要性と意味、相対度数の必要性と意味、誤差や近似値の意味などを理解し、知識を身に付けている。		目的に応じて資料を収集して整理し、その資料の傾向を読み取る能力を培う。	
次 時	観点ごとの評価規準				評価の方法	主たる学習活動	指導上の留意点 ポイント
	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解	〇の児童・生徒への手立て		
1	1					・絵はがきの縦の長さを測り、測定値を比較する。また、測定値の誤差の範囲について調べる。	近似値の活用場面を伝え、必要性と意味を理解させる。
	2			測定値を有効数字の桁数をもとに、 $a \times 10^n$ の形に表すことができる。		【記述の確認】 具体例を示して、測定値の表記に慣れさせる。	・有効数字の考え方をもとに、近似値を $a \times 10^n$ の形に表す。
2	3			度数分布表の意味と表し方を理解している。	【記述の確認】 各気温がどの階級に該当するかを確認させる。	・「水戸市の12月の平均気温が、過去に比べて上昇している」という新聞記事を題材としてとりあげ、度数分布表からその傾向を読み取り、理解する。	度数分布表の書き方と用語を丁寧に説明する。
	4		ヒストグラムなどを基にして、資料の傾向を読み取ることができる。		【発言の確認】 階級の幅の違うヒストグラムを比較させ、気付いたことをまとめさせる。	・前時の度数分布表をヒストグラムに表し、傾向を読み取り説明する。 ・階級の幅を変えたヒストグラムを比較し、違いを読み取り説明する。 ・複数の度数分布多角形を用いて資料の分布の様子を比較し、違いを説明する。	ヒストグラムと度数分布多角形を並べ、それぞれの資料の整理のよさを比較させる。
	5		ちらばりの程度を表すのに、最大値と最小値に着目して考えることができる。		【発言の確認】 範囲によって、資料の傾向に違いが見られることに気付かせる。	・年平均気温が同じ2つの都市の1月から12月までの各月の平均気温の資料をもとに、度数分布多角形を作成し、2つの都市の気温のちらばりの様子を調べ、範囲を考慮しながら、違いを説明する。	年度ごとの比較をするのに、度数分布多角形を用いると推移の様子がよくみえることに気付かせる。

第1図 単元構想シート

的な評価規準を設定するのが難しい」、「多忙な中でシートの作成ができるかどうか心配だ」という声もあった。カリキュラム・コンサルタント事業で直接学校に発信し、学校現場の声を直接聞くことができたことは、大変有意義であった。

(3) 研究での活用

平成 24 年度の研究の一つである「高等学校の教科学習における言語活動の充実に関する研究一年間指導計画への位置付けに向けて」において、検証授業に向けた授業構想と指導案作成の過程で「単元構想シート」について解説し、単元による授業構想について共通理解を図り、調査研究協力員に活用を依頼した。

単元（題材）による授業構想を実践した数学の調査研究協力員からは、「改めて数学的な見方や考え方を意識して授業を進めることの大切さに気付いた。考える力の育成は、その時間だけ意識しても身に付けさせることはできないので、数学的な見方や考え方について、常に意識し育成していくことが大切だと実感した」との感想をもらった。単元（題材）のみならず、年間を通じて力を育成していく必要性を実感したことがうかがわれた。研修講座で活用し、考え方を伝えていくことは異なり、調査研究協力校での活用は、時間を掛けて理解を図ることができ、「単元構想シート」によって授業が改善できたことの実感につながったようだ。

(4) 授業づくりの道すじについての解説資料作成

「単元構想シート」を示し、単元（題材）による授業構想の考え方を周知することが授業改善にとって重要なことである。

そこで、単元（題材）による授業構想について解説したリーフレットを作成し、発信することにした。

リーフレットでは、単元（題材）による授業構想とは、学習指導要領にある各教科・科目の目標や内容を実現するために、ある程度のまとまりを単元として授業を考えることであり、授業づくりの道すじとは、①単元（題材）目標の設定、②評価規準の設定、③評価のプロセスの設定、④評価方法の設定、⑤学習活動の設定であることを解説している。また、学習指導案との違いや教科による違いについて、Q & A の形で解説している。

教科・科目によって観点が異なるので、書式も工夫が必要になってくる。その点について、柔軟に対応できるように、総合教育センターホームページ上で、教科ごとの記入例を公開することにした。

(5) 「単元構想シート」の成果と課題

「単元構想シート」は、従来の 1 単位時間の展開を重視した授業づくりではなく、単元（題材）で児童・生徒に身に付けさせたい力を明確にし、観点ごとの評価規準を明確化し、単元を通して力が身に付くように指導のプロセスを構想するためのものである。授業づくりの考え方を示す一つの形として有効であり、研修

や研究の場面で活用できたことは成果といえる。

しかし、作成にあたっての難しさや使いにくさについての指摘もあった。書式の工夫や活用場面の整理などに努め、より良いものを発信していきたい。

3 授業観察「授業レリーフシート」の活用

よい授業づくりをしていく際には、自分の授業を客観的に捉えられることが必要であり、その際の観点が、今求められる授業の観点到即していることが必要である。そして、授業の相互観察や研究協議が、日常かつ効果的に行われることが望ましい。

そこで、平成 23 年度授業改善プロジェクトにおいて、授業観察シートの開発に取り組み、授業の様子を浮き彫りにする (relief) という意味で「授業レリーフシート」を作成した。

(1) カリキュラム・コンサルタント事業等での活用

学校訪問による授業参観の機会を「授業レリーフシート」を活用する場として考え、学校訪問支援、カリキュラム・コンサルタント事業などにおいて、活用することを所員に徹底した。

活用した所員からは、「記載内容は、研究協議等の場で、授業を振り返る際に便利」、「授業の進度に合わせ、自由にメモできた」などと感想があった一方で、「有効に活用できなかった」といった感想もあった。

(2) 様式の改訂

平成 24 年度の活用状況、及び所員からの意見を踏まえ、「授業レリーフシート」として必要な事項を吟味し、記入しやすいもの、広く活用できるものとなるように、項目を整理した。

授業は 1 単位時間を見るので、本時の評価規準とそこのための学習指導の工夫点について、授業者が記入することとした。そして、授業の相互観察で大切なことは、生徒の学びを観ることであると考え、生徒の学習活動や様子の記入欄を大きくした。（第 2 図）

授業観察用「授業レリーフシート」【授業中記入用】				
年月日	授業担当者名	科目名	学年、クラス	観察者名
本時の評価規準			そのための学習指導の工夫	
※評価規準に対応する学力の 3 要素の <input type="checkbox"/> を塗りつぶす。 (<input type="checkbox"/> 知識・技能 <input type="checkbox"/> 思考力・判断力・表現力等 <input type="checkbox"/> 学習態度)				
授業の流れ		生徒の学習活動の様子		

第 2 図 授業レリーフシート 表面

また、授業後に参観した授業を振り返って記入するための項目を、「児童・生徒に身に付けさせたい力が実現されたか」、「授業の基本的スキルは効果的に活用されていたか」の2点に絞り各学校で独自の項目がある場合に記入できる欄を加えた。これまでのシートに共通項目として、学習指導要領の趣旨を踏まえた観点を記載する欄があったが、これらの視点は、評価規準と合わせて記入できるように改訂した。（第3図）

授業観察用「授業レリーフシート」【授業後記入用】		
研究項目	項目（視点）	授業後の振り返り
	生徒に身に付けさせたい力が実現されたか。	
	授業の基本的スキルは効果的に活用されていたか。	
	※各校独自項目	
その他		

第3図 授業レリーフシート 裏面

(3) 「授業レリーフシート」の発信

「授業レリーフシート」の発信に当たり、活用方法も併せて周知する必要があるだろう。具体的には、生徒の姿をどのように記録するか記入例を作成したり、校内授業研究を充実させるために、授業後の研究協議での活用方法について提示したりすることが考えられる。

4 組織的に取り組む授業改善冊子の作成

平成24年3月に神奈川県教育委員会が作成し、全県立高等学校及び中等教育学校の全教員に配付した「組織的な授業改善に向けて～高等学校における授業研究の取組～」において、各学校での授業改善の推進に当たって、個々の教員の授業がより良いものになるのはもちろんのこと、学校全体で共通の目標を定め、組織的な授業改善を進めていくことが重要であることが述べられている。

そこで、総合教育センターでは、組織的・計画的な授業改善の参考になるよう、先進的な取組を紹介することや、各学校の授業改善の取組の参考となる冊子「組織的に取り組む授業改善～学校経営の中心に授業改善をおく～」を作成することとした。

(1) 学校経営の中心に授業改善をおく

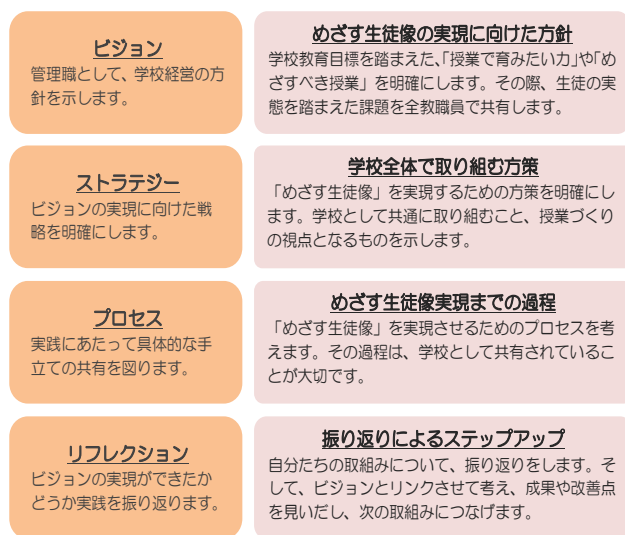
作成に当たり、誰を対象として、どのようなメッセージを発信するのか、指導主事だけでなく教育指導専門員（高等学校の退職校長）も交えた協議を行った。

そして、「組織的に授業改善を推進するためには、授業改善が学校経営の柱となる必要がある」「授業改善を中心に、学校運営を考えることが重要だ」といった考えから、校長を対象とした、学校経営（マネジメント）の視点で作成することにした。

まずは、経営（マネジメント）の視点から、「ビジョン」、「ストラテジー（戦略）」、「プロセス」、「リフレクション（振り返り）」といったキーワードを押さえた。

次に、これらのキーワードを学校に当てはめて、「ビジョン」は「めざす学校像」、「ストラテジー」は「めざす学校像」を実現させるための手立て、「プロセス」は「めざす学校像」実現までの過程、「リフレクション」は「めざす学校像」が実現したかどうかの評価として、整理した。

さらに、キーワードを踏まえた授業改善の取組を提示した。（第4図）



第4図 学校経営の四つのキーワードと授業改善の視点

(2) 先進的な取組の収集

普通科高校、専門高校、総合学科高校など、学校の特色に合わせ、学科等のバランスに配慮して、7校に取材を行った。

取材の際、各学校の取組について校長から話を聞く中で実感したことは、前述の四つのキーワードが一連の流れとなって機能していることである。どの学校においても、校長のビジョンが明確で、ストラテジーを共有して確実に授業改善が進み、リフレクションも行われていた。

そこで、各学校におけるキーワードに関連する取組を整理し、様々な取組の中から、特徴的な取組に焦点をあてて、事例集としてまとめることとした。

ここに挙げた事例が、多くの学校での実践に結びつくように、リード文を付けたり、校長の一言を記載し

たりするなど、紙面の構成を工夫した。(第5図)

事例
5

リフレクションを共有することで主体的な取組みにつながる

この高校では、教科会が授業改善の場であるとして、教科での話し合いを充実させ、さらに、教科ごとの話し合いの内容を全教職員で共有しています。職員会議での教科会の報告は、教科間の理解を深めるだけでなく、個々の教職員にとって、自分の考えや実践が全体の中で認められたという自信となり、互いの刺激となって、教職員の主体的な取組みにつながっています。

ビジョン
学校としての「良い授業」の定義
・発展的な内容を含む教材を精選する
・ライブ・ラーニングな授業展開を目指す
・思考力・判断力・表現力を育成する生徒の活動を取り入れる

ストラテジー
年度当初にスケジュールを確定
・研究発表会、授業互見週間、教科会等の日程を計画する
・報告様式を初めに提示しておく

プロセス
中心となる教職員からの情報発信
・職員会議での提案や、教科会の通知、教科会の結果報告等は、校長からではなく、教員からの発信とする

リフレクション
教科会の充実と振り返りの共有
・個々の振り返りを共有する場として教科会を設定する
・教科会報告を推進担当グループが集約し、職員会議で共有する

4月末の職員会議で、授業改善の目標と研究テーマについて提案し、互見授業、生徒による授業評価の活用、授業研究発表会等の年間計画と、それぞれの取組みに関連して、教科会での事前検討や事後の振り返りを位置付けます。その際、報告様式を提示して、教科会での検討結果を学習推進グループに提出することを確認し、教職員に振り返りを意識付けます。

例えば、互見授業後の教科会では、成果と課題について、この高校で定めた「良い授業」であったかどうかについて協議します。また、生徒による授業評価についての教科会では、結果分析と今後の授業の方向性について話し合い、授業づくりのポイントはどこにおくか、生徒に身に付けさせたいのは何かなど、教科内で再確認します。

そして、教科会後に各教科から提出された報告は、学習推進グループが集約し、職員会議で報告をします。

年間の予定

5月9日～10日	研究授業(国語、数学、外国語)
6月11日～29日	授業後の教科会
6月22日	授業互見週間 公開研究授業 (国語、英語、数学、理科、保健体育、外国語)
6月25日	教科による研究協議会
7月13日	生徒による授業評価 授業改善のための教科会 (生徒による授業評価の分析)
10月11日	授業研究発表会 (教科会で検討した指導案で実施)
12月3日	生徒による授業評価
12月4日	授業実践報告会 (授業改善のための教科会)
2月5日	授業改善のための教科会 授業改善のための教科会 (生徒による授業評価の分析)

校長先生の一言

その学校にとってベストな授業を考えることが第一歩です。それをわかりやすく教職員に示すことが必要です。初めに授業改善の方針を全教職員で共有できたならば、あとは計画に従って進めるだけです。

計画の中で重要なことは、授業研究発表会の実施と教科会の充実です。教科会報告の集約(リフレクション)を職員会議で担当教員が読み上げてください。それは、教職員一人ひとりの授業改善に対する思いの詰まった文書となり、校長にとってはまさに宝物です。

第5図 「組織的に取り組む授業改善」冊子事例紹介ページ

事例は、1ページに1校の取組みを掲載している。左側にキーワードに関連した取組みを取り出し、取組みの全体像が見えるように工夫した。

例えば、B高等学校の「ビジョン」は学校としての良い授業を定義することである。そして、「ストラテジー」として、年度当初にスケジュールを確定し周知して、更に取組みの報告用紙の様式を配付している。その実践の「プロセス」では、中心となる教職員からの情報発信をし、職員全体で情報を共有しながら、実践を重ね、それが「リフレクション」となり、組織的に授業改善が推進されている。

このように、全体の流れを確認した上で、具体を知るようにすることで、各学校にとって参考になると考える。

取組みのまとめ

「授業改善プロジェクト」を立ち上げ、研究を始めるに当たり、「よい授業」とはどのようなものか、所員対象にアンケート調査を実施した。その際、「授業づくりに大切なもの」についての問いに対して、一番多かった回答が、「児童・生徒の実態把握」「児童・

生徒に付けたい力を明確にもつ」であった。つまり、児童・生徒を理解し、児童・生徒に寄り添った授業を実践することが重要であり、児童・生徒主体の授業が「良い授業」であることを、総合教育センターとして共有し取り組んできたのである。

そして、作成した「高等学校初任者のための『授業づくりガイド』」、「単元構想シート」、「授業レリーフシート」は、その作成の過程で所員が深く関わり、一丸となって取り組んだものである。所員の思いのこもったこれらの資料を活用することによって、児童・生徒主体の授業がつくられ、授業改善が進むと考える。

今後は、これらの資料を活用すること、より良いものとして発信し続けることが重要である。

おわりに

「授業改善」は、教員にとって常に意識すべき課題であり、総合教育センターとしても不断の取組みに位置付けられるものである。

平成25年度には、組織的な授業改善の取組みを進めるために、研究協力校を指定した研究も予定している。「個々の教員への支援」と「学校への支援」を今後も追究していきたい。

[総合教育センター授業改善プロジェクトチーム]

教育課題研究課長	戸田 崇
企画広報課主幹(兼)指導主事	鈴木 美喜
同課指導主事	木村 輝美
教職キャリア課主幹(兼)指導主事	角田 洋子
同課指導主事	井上 達也
教育課題研究課指導主事	神橋 憲治
教育相談課指導主事	藤田 正義
特別支援教育推進課指導主事	由谷るみ子